
東洋

夕焼け

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東洋

【Nコード】

N6002G

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

ついこの間、某SNSつまりmixiみたいなアレにて俺は見ず知らずの人たちの前でかなり横暴な態度をとった。それに対してみんなから総叩かれる事態になって、その騒ぎの締め括りとして俺は自分の行動の理由をツラツラ書いて載せた。その日記をここにも晒しと思う。この日記の内容も俺がした横暴も全部実話だ。別に弁明がしたいわけじゃない。ただこれを読んで君らが感じたままに受け止めてくれればいい。俺はただ自分の人生のうちの一瞬を記すだけだ。

東洋

まず長い上にかなり言い訳くさいから、そうゆうの嫌いな人は大人の常識とやらでスルーおながいします。文句罵声否定は一切受け付ける、が。

真つ当な常識人は自分と考えを違えるものを頭ごなしに否定はせんのじゃないか、と思ったりもする。

もちろんこんなのは詭弁だ。

よく分かつてる。

俺のこの前までの、一連の馬鹿げた日記には元ネタがある。

俺がちよっと前にバンド系SNSやってた頃に出会った東洋って奴だ。

そいつの日記にはこんな事が書かれてた。

「男女平等なんて皆様いますが。

俺はそんなの本気糞だと思ってる。

女は男の道具であればいいし、女の権利なんて知ったことじゃねー

馬鹿！！！」

「俺は天才だ！！！！お前らは総じて糞だ！！！！俺がそういうんだから間違いない！！！！文句あるなら殴るだけだ！！！！！！！！」

もちろんみんなからむちゃくちゃ叩かれてた。

最後はSNS管理人から強制退会させられてた。

そんな東洋が強制退会になる直前、俺にメッセージを送って来た。

「お前は分かってるやつだよな？」って。

なんだこいつ？何かっこつけてんだかって思った。
でもなんとなく話の流れで会ってみる事になった。

丁度去年の今頃の時期だ。

終電間にそいつは多摩センターにやって来た。

金色のモヒカンの、チビデブのヤンキーだった。
前歯が無かった。

東洋の歌は、正直ほんとウンコだった。

ただの罵声だった。

とても聴けたもんじゃなかった。

とても人を馬鹿にしているレベルじゃないと思った。

歌うのも飽きて、東洋と朝方まで話をした。

「自分は小学校の頃から何故か人と同じようにする事がどうしても出来なかった。

人は俺に言った。

そんなんじゃない駄目だ、もつとこうしなきゃいけないって。

お前みたいな振る舞いは間違ってる、自分達みたいに普通にすることが正しいんだ。

なんで、とかじゃなくて、そういうもんなんだからお前もそうなさいつて散々色んな人に言われてきた。

そうかなるほど、と思って言われた通りにしようとしたけど結局上手く出来なくて、自分はみんなの輪からはじき出された。

引き籠もりになって、すっごいあれこれ考えた。

とにかくたくさん考えた。

考えてるうちにイライラしてきた。

何で皆”自分の考える当たり前”を、人にも押し付けるのか、その”皆の当たり前”を皆と同じように出来ないってだけで何でゴミ扱いされなきゃいけないのか、なんで自分が引き籠もりになんてならなきゃいけないかったのか。

本気で死ぬほど考えた。

でも俺は結局俺でしかないんだから、もう全部ぶっ壊しちゃえばいいじゃねーかって思った。

皆のルールに自分が従って生きる理由なんて無いと思った。

どうせ奴らのルールに従おうとしたって上手く出来ない自分はまたすぐはじき出されるんだ」

って東洋は言った。

無責任な優しさで、無責任な正しさで人を苦しめる奴が心底嫌いだ。

って東洋は言った。

そいつが何を言いたいのか、俺にはなんとなく分かった。

別に尾崎豊的な反社会的あれこれとか、感傷的悲劇のヒーロー的なあれじゃなくて、

ただこいつは自分のありのままの姿で生きてて、それを無理やり「自分の考える正しい姿」に矯正しようとする奴が今まで何人もいて、そいつらは東洋が上手く出来無い下手くそだからって理由でこいつを切り捨ててきて、こいつなりには頑張ったりもしたのにそれも否定されて、その結果こいつはもう破れかぶれでこういう考え方になったんだなって思った。

電車が無いから、東洋をうちに招き入れた。

泊めようと思ったけど、俺は前の日記でも書いたように超ビビリだから怖くて出来なくて、だから東洋にやっぱ帰って自分ちで寝てくれって言った。

東洋は怒った。

俺は殴られると思った。
でも

「なんでお前そんなこと言うんだよ」

って東洋は俺の話を聞いてくれた。

俺は、なんで人を自分ちに泊めるのが怖いのか東洋に説明した。

俺は自分の家によく知らない人間がいて、そういう中で寝ようと思っても嫌な考えが浮かびまくって、

怖くなって、眠れない。

だから泊めてやれない、すまんって言った。

「俺もそういう疑心暗鬼になる時期あったから、ちょっと分かるよ。遼のこと何も知らんと無理いって悪かった」

って東洋は真剣に俺に謝って帰ってくれた。

東洋を駅まで送る途中で東洋のケータイが鳴った。
彼女さんからだった。

東洋は電話越しに必死で謝ってた。

「今から帰るけん、心配かけてすまん、おう、だいじょうぶよ、すまん、すまん」

って。

「女なんて男の奴隷だ！」くらいのこと、ネットで書いたりしてるくせに、こんな奴なんだって思った。
ちよっと好意がわいた。

だから帰りの交通費500円をあげた。

その日の夜の東洋の日記には俺の事が書かれてた。

「俺は昨日ある奴に会いに行った。
しかし終電が無くなったから、そいつの家に行った。」

そいつは俺に言った。

初めて自分の家に招き入れたのがお前だって。

俺は誰も彼もを家に呼ぶようなやつじゃないんだって。

お前だから家に入れたんだって、俺に言った。

俺は調子に乗って、そいつの日記に落書きをしようとした。

もちろんそいつは怒った。

だから俺は帰る事にした。

帰りにそいつは500円くれた。

楽しい一日だった」

そんな風な内容だった。

東洋がそれまで書いた日記の中で、唯一他人を罵る内容じゃないものだった。

その後もう一度だけ東洋と会った。

来てすぐ、ちよつとしたことで喧嘩になった。

東洋は腹立たしげに「お前の言う事、わけわからん」と吐き捨てて家に帰った。

その日の夜、東洋から電話がかかってきた。

「遼がそういう風にすごくものを考える人間って、俺分かつとうばい。」

遼がそういう風にしか出来んって、俺分かつとうばい。

だから、遼はなんも気にせんとよかよ

もつとちゃんとその辺考慮してやれんかった俺が悪かつとうばい」

なんでこいつが、世の中からここまで否定されてはじき出されなきゃいけなかったのか、俺には分かんなかった。

みんなの言う正しいやり方を守らないから？

みんなの心の平穏をぶちこわしにするような奴だから？

確かに、東洋はそういう事を平気でやった。

コンビ二でも、勝手にレジの側に入って行ってタバコ抜き取ってお金だけ置いて出てくるような奴だった。

でも俺には東洋と、東洋を否定してる奴ら、お互い様に見えた。

東洋が正しいとも思わなかったけど、東洋を頭ごなしに否定してる奴が正しいとも思えなかった。

そんな頭ごなしの否定が「大人のする事」とはとも思えなかった。

東洋は一体何を求めてあんな馬鹿げた振る舞いをしてたのか、俺はそれがすごく気になった。

なんとなく東洋の事を最近ふと思い出して、俺は東洋の真似がしてみたくなった。

俺が最近になって人を罵るような事を言い出したのは、そういう理由だ。

言い訳くさいけど、これは実話だ。

数年前に東洋から送られてきたメールもまだ残ってる。

東洋が書いた詞に俺が曲を付けた歌もまだ残ってる。

俺は自分のした事についてすごく今悩んでる。

俺は正直東洋ほど完全に心の底から世の中を憎んで、馬鹿にしてはいない。

だから俺が東洋みたいな真似をしたのは検討違いな事だったと思う。

でも東洋がしてた事が間違ってるのも俺には思えない。

東洋は常識を破って皆に嫌な思いをさせたけど、
皆は東洋に常識を押し付けて辛い思いをさせた。

どっちが正しいとか、何が間違ってるとか、そういうのってちょっと違うんじゃないかって、俺は思った。

思ったけど俺は東洋じゃないから、そういうのについてちゃんとは分かんなかった。

自分でやってみて、自分が馬鹿にされてみて、「東洋があの時一体何をしてたのか、あの時東洋は一体どういう気持ちだったのか」を知ってみたいって思った。

それが、俺が「常識の無い態度」を取った理由だ。

嫌な思いさせてすまんかったと思ってる。

でも俺も色々下手くそな人間だから、東洋の気持ちちょっと分かる。
正直ちよっと懂れた。

ここまで世の中を露骨に敵にまわせる奴ってかっこいいなって。
でも俺にはちよつと無理だった。

東洋ほど強く皆を憎めない。

それに俺は東洋ほど根性座ってない。

全部言い訳だから読まないでくれていいと思う。

ただ実際起こったこと、実際に思ったことを書いてみただけ。

東洋2

この間日記に書いた東洋の事を、もう少し書こうと思う。

ただついさつき新聞配ってて思ったことを書き留めておきたいだけだから、読みたい人だけ読んでくれたらいいと思う。

東洋と俺はほんの2回だけ、多摩センターの駅で歌を歌った。

その歌っていうのは、俺がギターをその場の気分で適当にかき鳴らして、東洋が「ボケ！カス！死ね！！」とひたすら通行人に怒鳴り倒すだけのものだった。

正直なところ、俺は東洋の横でギターをかき鳴らしながら、こんな風な事を思ってた。

こんなの音楽でもなんでもない。

正直ちょっと恥ずかしい。

もうちょっと音楽らしい、旋律とリズムのある音楽をやりたいって。

そんな風に思いながら、恥ずかしさを隠すためにギターを無心にかき鳴らした。

会う前日、東洋は言った。

「正直遼と会うのは怖い。

遼の前で歌うのは怖い。

だって俺の歌が本気じゃなかったら、遼絶対見抜いちゃうだろう。だからすげー怖いよ」

俺は、よくデルタブルースがどうだの、1969年のグループがどうだの言うけど、はっきり言って音楽の事なんてちんぷんかんぷんだ。

なんとなく、そういう「昔の偉大な音楽」みたいなものを「分かってる」風にいつとけばハクがつくかなって。

そんな風に思っ言ってるだけ。

実際は全然分かってない。

でも、そんな俺に対して東洋が感じてた事、俺ちよつと分かる。

俺にも、そういう相手がいた。

つい去年まで8年くらい一緒にやってたさとりって奴だ。

さとりは俺の2個上で、カントリーだかポップだかロックだかよく分かんないジャンルの音楽をやってた。

さとりは、俺の音楽に対して、いいとか悪いとかそういう事をほとんど言わなかった。

俺が半端な気持ちで歌いだした時は大抵、さとるはギター置いてコンビニにコーヒー買いに行った。

俺がほんとに何かちよつとこう、気持ち入れて歌ってる時とか、ほんとに無心に演奏できた時には、ただ横でソロを弾いてくれた。

で、演奏が終わったらただ一言「悪くなかったよ」って言うてくれた。

俺は、さとるの前で演奏するのが8年間ずっと怖かった。

東洋も、俺に対してそんな風感じてたのかなって思った。

で。

東洋は歌った。

「糞！ボケ！！死ね！！！」って。

ああ、これは本気なんだなって、思った。

通りに行く人に、本気で「こいつら糞だ！全員死んでしまえ！」って思っ
て、吐き捨ててるんだなって。

嘘偽り無いなこれって。
思った。

東洋がどんな風に生きてきて、
どんなものを見てきて、
どんな人たちから何を言われてきて、
結果として「糞！！ボケ！！死ね！！」なんて道行く人に吐き捨てるようになったのか。

このチビでデブで前歯の無いモヒカン君がなんで「俺は天才だ！！」なんてイチイチ言いたがったのか。

横でギターを弾きながら俺はずっとそこを考えてた。

これだって音楽じゃねえかって。
思った。

十分ブルースしてるじゃねえかって。
俺は思った。

東洋の横でギター弾くのを恥ずかしいなんて思っちゃった半端な自分をこそ恥ずかしいと思った。

東洋は馬鹿じゃないから見抜いたと思う。
俺が東洋と違って半端なアレで世間を見下すばかりのただの雑魚だ
ってこと。

だから、東洋は俺の前からいなくなった。
当然の事だ。

俺は、今でも時々夜中の多摩センター駅で歌を歌ってる。

東洋のこととか、さとの事を考えて歌ってる。

一緒に歌った歌とか、夜の匂いとか、思い出して歌ってる。

俺はミュージシャンとして見たらほんとウンコだけど、貫いてるものなんにも音に乗ってないけど、でも自分の歌は嫌いじゃない。

俺に興味をちよつとでも持ってくれた人には、聴いて欲しいって思う。

別に評価して欲しいとか、理解して欲しいとかじゃなくて、ただ聴いて欲しいと思う。

そのあとちよつと話して、ニヤニヤしたい。

正直その後のことなんて、俺は馬鹿だから考えられない。

こういう気持ちって、分かってもらえるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6002g/>

東洋

2010年10月9日18時41分発行